

知の先達たちに聞く(2)

——埴治夫先生——

まえがき

岡 真理\*

日本における外国文学の研究を考える上で、当該文学の日本語訳がどれくらい出版されているかは、研究の水準をはかるための一つの重要な指標であるだろう。埴治夫先生は現代アラブ文学翻訳の草分け的な存在であり、1974年に発表された「狂気の独白」以降、ナギーブ・マフフーズの作品の翻訳を数多く手がけてこられた。マフフーズのカイロ三部作の第一作目として有名な『バイナル・カスライン』を日本語で読めるのも、埴先生の翻訳のおかげである。邦訳自体が数少ない中東現代文学の分野で、埴先生が果たしてこられた役割はいくら評価してもしきれない。2009年にはマフフーズ晩年の作品『シェヘラザードの憂愁』と、『泥棒と犬』の邦訳をたて続けに出版されるなど、喜寿を過ぎた今もお現役で、中東現代文学の紹介を精力的に行っておられる。

その埴先生を、2009年6月、中東現代文学研究会にお招きし、ご講演いただいた。以下は、その講演およびその後の質疑応答の記録である(講演自体は「『シェヘラザードの憂愁』を中心にマフフーズ文学について」という題目のもと6月28日14:00~15:30に行われた)。中東現代文学研究の先達として、その後の世代とは一味も二味も違う体験をしてこられた埴先生に、翻訳を始められたきっかけをはじめ、翻訳をなさってきたなかでのご苦労などをお話いただき、日本における中東現代文学受容の歴史を確認したいということが講演をお願いした趣旨であった。実際のご講演は、埴先生の温かくユーモラスなお人柄も手伝って、私たちの予想を超えて実りのあるものとなった。特にご専門のナギーブ・マフフーズに関しては略歴や著作目録をご用意いただき、近訳著の『シェヘラザードの憂愁』の詳細な説明をしていただいたことは大きな財産となった。できるだけ講演の雰囲気伝えるよう努力したが、どこまで再現できているかはなはだ心もとない。ともあれこの記録が中東現代文学研究の礎になることを願ってやまない。

ここで基本資料として埴先生の略歴を紹介するとともにご著書を列挙しておきたい。

・埴先生略歴

1931年茨城県生まれ。

1952年外務省入省。

1953年から54年までカイロでアラビア語研修を受けたのち、1957年までカイロ駐在。その後、レバノン、シリア、エジプト、イラク、オーストラリア、サウジアラビア、カタール、オマーンで勤務する。

1994年退官後は東京経済大学、常磐大学で非常勤講師を務める。

1974年に翻訳「狂気の独白」を発表以降、多数の翻訳がある。代表作としては同じくナギーブ・マフフーズの『バイナル・カスライン』の翻訳が挙げられ、二度版を重ねている。



\* 京都大学大学院人間・環境学研究科教授。中東現代文学研究会代表

・著作目録

- (翻訳) ナギーブ・マフフーズ「狂気の独白」、野間宏責任編集『現代アラブ文学選』(創樹社、1974年) 所収。
- (翻訳) ナギーブ・マフフーズ『渡り鳥と秋』、アジア経済研究所、1976年。
- (共著) 『アラブ・ジョーク集』、実業之日本社、1978年。
- (翻訳) ナギーブ・マフフーズ『現代アラブ文学全集4 バイナル・カスライン上』、河出書房新社、1978年。
- (翻訳) ナギーブ・マフフーズ『現代アラブ文学全集5 バイナル・カスライン下』、河出書房新社、1979年。
- (翻訳) アブー・ヌワース『アラブ飲酒詩選』、岩波文庫、1988年。
- (翻訳) ナギーブ・マフフーズ『現代アラブ文学全集4 新装版 バイナル・カスライン上』、河出書房新社、1988年。
- (翻訳) ナギーブ・マフフーズ『現代アラブ文学全集5 新装版 バイナル・カスライン下』、河出書房新社、1988年。
- (共著) 『パレスチナ選挙後のイスラーム諸組織の動向調査』、日本イスラーム協会、1996年。
- (翻訳) 『ナギーブ・マフフーズ短編集——エジプト人文豪の作品より——』、近代文藝社、2004年。  
 [「ザアバラウイー」「空っぽのカフェ」「旅立ちの前」「手品師が皿をさらった」「頂上の人々」収録]
- (翻訳) ナギーブ・マフフーズ『バイナル・カスライン上』、河出書房新社、2006年。
- (翻訳) ナギーブ・マフフーズ『バイナル・カスライン下』、河出書房新社、2006年。
- (アラビア語訳監修) 美智子皇后文、武田和子画 (アフマド・ムハンマド・ファトヒ・ムスタファア訳)  
 『はじめてのやまのほり』、国際交流基金、2006年。[1991年に至光社から発行された絵本の日本語・アラビア語訳バイリンガル]
- (翻訳) ナギーブ・マフフーズ『シェヘラザードの憂愁』、河出書房新社、2009年。
- (翻訳) ナギーブ・マフフーズ『泥棒と犬』、近代文藝社、2009年。

なお、中東現代文学研究会は文部科学省委託業務「人文学及び社会科学における共同研究拠点の整備の推進事業」(イスラーム地域研究機構) 京都大学拠点の一環として組織されており、現在はアラブ文学、ペルシア文学、トルコ文学、ヘブライ文学を中心に研究活動を行っている。将来的にはそれ以外にもヨーロッパ圏のムスリム移民文学や、中東以外のイスラーム圏の文学の研究をとりこむことも視野に入れていることを書き添えておく。講演とともに収録したインタビューは、研究会代表およびこの研究会のメンバーである勝田茂(大阪大学世界言語研究センター)、藤元優子(大阪大学世界言語研究センター)、福田義昭(京都大学非常勤講師)の四名が行なった。

## ナギーブ・マフフーズと私

埴 治夫

### 1. ナギーブ・マフフーズ文学との出会い

まずは私とナギーブ・マフフーズとの関わりを中心にお話しいたします。私は1953年に外務省より戦後初のアラビア語研修生としてカイロに派遣され、アラビア語を学びました。研修期間は本来ならば3年間なのですが、1年半に短縮されたため中途半端な勉強で終わってしまいました。しかも私は茨城出身で、外務省に入って初めて東京に出て、それから1年でカイロへ行ったため、茨城弁のアラビア語を話していた可能性があります。また外国語習得の一番手っ取り早い方法は女の人と仲良くなることですが、私はモテないのでそのような機会がなく、話すほうはあまり上達しませんでした。ただ読むほうは、小学校での勉強に加えて家庭教師にも習ったので、いろいろなアラビア語の書籍を読むことができるようになりました。歴史・政治・社会に関する本や文学などを読みましたが、その中で特にアラブ文学に関心を持ち、当時売り出し中のナギーブ・マフフーズの作品に惹かれるようになりました。しかしその当時の学力から言って長編を読みこなすのはまだまだ難しく、おもに短編を読んでいました。

1970年代、私が再度カイロに赴任したとき、再びアラビア語を勉強し、ナギーブ・マフフーズの作品を本格的に読みはじめました。その過程でナギーブ・マフフーズの作品の日本語訳を行うことを思いつき、短編では「狂気の独白」(“Hams al-Junūn,” 1938)、中編では『泥棒と犬』(*al-Liṣṣ wa-al-Kilāb*, 1961)と『渡り鳥と秋』(*al-Summān wa-al-Kharīf*, 1962)を訳しました。この時期、私はナギーブ・マフフーズに3回お会いしました。最初は1973年の5月31日です。そして翌1974年12月にも続けて2回会うことができました。12月にお会いしたなかで一回目は大阪外国語大学の池田教授とご一緒させていただき、次は同教授に加えて慶應義塾大学の黒田助教授と連れ立って会いに出かけました。なお、それからずっとあとの1989年6月に再びカイロでナギーブ・マフフーズと面会する機会を得て、前年に彼がノーベル文学賞を受賞されたことに遅ればせながら祝意を述べさせていただきました。

ところで、1974年1月には、野間宏先生がアジア・アフリカ作家会議の関連でカイロを訪問し、帰国後現代アラブ文学を日本に紹介するために尽力されました。その結果、1974年6月に創樹社から『現代アラブ文学選』(野間宏責任編集)が出版され、本書には私が既に訳していた短編「狂気の独白」が収録されています。続いて1978年から1980年にかけて河出書房新社より『現代アラブ小説全集』が出版されますが、これにナギーブ・マフフーズのカイロ3部作の第1部である『バイナル・カスライン』が含まれることになり、1975年1月私はその翻訳を依頼されました。当時私はカイロの大使館勤務中で、公務の余暇に翻訳を始めましたが、本格的に翻訳に従事したのは、同年7月に帰国してからです。思えば、勤務を終えて帰宅後、夜遅くまで訳業に没頭しましたが、周囲に教えを乞うアラブ人を見当たらず、またその頃英訳や仏訳がなかったため、孤軍奮闘を余儀なくされました。やがて、1978年私の誕生日に当たる11月8日に上巻が出版されましたが、その直前私はサウジアラビアに赴任しました。下巻は翌1979年9月に出版されています。

その後2004年に近代文芸社より『ナギーブ・マフフーズ短編集』が、2009年には河出書房新社

より『シェヘラザードの憂愁』が出版されました。カイロ3部作の第2部と第3部については、94年に外務省を退官してから随分経って訳了しましたが、残念ながら出版の機会に恵まれず、結局訳稿の散逸を恐れ、2006年3部作全部のコピーによる私家版を作成しました。

## 2. ナギーブ・マフフーズの足跡と人物

次に、ナギーブ・マフフーズの生涯を簡単に振り返り、その足跡をたどってみたいと思います。彼は波乱万丈な人生を歩んだ人ではなく、むしろわれわれの目からみると地味な実生活を送ったように見えます。彼の生真面目な性格が関係しているのでしょうか。年表をお配りいたしましたのでご参照ください（この節の末尾にあります）。

まずナギーブ・マフフーズのフルネームはナギーブ・マフフーズ・アブドルアジーズ・イブラーヒーム・アフマド・バーシャー (Najīb Mahfūz ‘Abd al-‘Azīz Ibrāhīm Aḥmad Bāshā) で、そのうちナギーブ・マフフーズが彼個人の名前であって、ナギーブが単独で名となっているわけではありません。このナギーブ・マフフーズという名は彼の出生当時有名であった医者であるナギーブ・バーシャー・マフフーズ (Najīb Bāshā Mahfūz, d.1974) にちなんで命名されました。アブドル・アジーズは父親の名前です。彼は1911年12月11日カイロ旧市街のガマーリーヤに生まれました。彼はこの旧市街に強い愛着を抱き、1924年に一家が新興住宅地アッパシーヤに引っ越したのちもたびたびそこを訪れており、同地区が多くの作品の舞台にもなっています。

彼は小学校時代から熱心な読書家で、探偵小説や冒険小説などの翻訳物に始まり、次いで著名なエジプト人作家の作品やアラブ文学の古典を読み始めたそうです。哲学者タイプの文人アッバース・マフムード・アッカド (‘Abbās Maḥmūd al-‘Aqqād, d.1964) の影響を受け、1930年国立エジプト大学（現カイロ大学）の文学部哲学科に入学しました。在学中は哲学の研究に励みながら、論文をいくつも書いて雑誌に送り続けていました。彼は高校時代に英語やフランス語を学んでおりましたので、翻訳もおこなっています。1931年に James Baikie 『古代エジプト (Ancient Egypt)』のアラビア語訳 *Miṣr al-Qadīma* が進歩的な知識人であるサラーマ・ムーサー (Salāma Mūsā, d.1958) の雑誌出版社から大学在学中に出版されました。

1934年大学卒業後、フランス留学を志すも選に漏れ、カイロ大学の事務局に官吏として勤めはじめました。その傍らで哲学と文学の両方に情熱を注ぎましたが、1936年に人生の進路として最終的に文学を選びました。まず世界文学に関する John Drinkwater (d.1937) 著 *The Outline of Literature* を読み、そこに挙げられている世界の代表的な作家の作品を主に英語で、あるいはフランス語で読むと同時に、旺盛な執筆活動を行いました。

公務と執筆を同時に行う状況は、1971年に60歳で定年退職するまで続きましたが、その間1957年から58年にかけて畢生の大作であるカイロ3部作を出版し、その後も作風や手法を発展させつつ多彩な作品を発表し続け、1988年にはノーベル文学賞を受けました<sup>1)</sup>。

しかし1994年イスラーム過激派に襲われ、負傷するといったことがありましたが、94歳まで長生きして、2006年8月30日に逝去しました。

彼は西洋哲学を研究し、幅広い教養を身につけた知識人でした。政治的には本来熱心なエジプト民族主義者でしたが、やがて社会主義に共感を抱きました。今、社会主義と申しましたが、彼が初

1) その趣意書は、歴史的作品に触れた後、『ミダック横町』(Zuqāq al-Midaq, 1947)、「カイロ3部作」(Thulāthiyya al-Qāhira)、『わが町内の子供たち』(Awlād Hārati-nā, 1967) に言及している。

めに影響をうけたのはフェビアン的社会主義です。それには彼の私淑したサラマ・ムーサーの影響が大きかったようです。またマルキシズムにもある程度の興味を示していました。

彼は政治に大きな関心を寄せており、民主主義を支持していました。彼の作品も政治がらみの作品が多く、ナセルやサダトの体制を批判したものもあります。イスラームについては開明的で、原理主義を嫌っていました。他方、スーフイズムに惹かれ、大学時代スーフイズムの詩を多読しましたが、現世を超越し、社会や政治に無関心なスーフイズムの在り方にはむしろ批判的でした。そのなかで、1960年前後に当時のスーフイズムとは異なる社会主義的スーフイズムの考えを明らかにしています<sup>2)</sup>。

人格について述べるならば、時間に厳密だということがまず挙げられます。官吏としての勤めを果たしながら、哲学や文学に割く時間も必要なため、厳しい規律を自分に課す必要があったのででしょう。実に几帳面で、約束の時間をきちんと守る人でした。1960年初めに糖尿病によるアレルギー性疾患が発覚し、夏場は執筆活動を休止せざるをえませんでした。限られた時間内で精力的に執筆活動を行っていました。

彼が海外に渡ったのは、イエメン（イエメン戦争にエジプトが軍を送っていた）とユーゴスラビアへ公務で短期出張に、また91年に治療のためロンドンへ行った3回だけで、1988年アラブ人として初めてノーベル文学賞を受けたときも、その受賞式には友人のサルマーウィー（Muḥammad Salmāwī）を代理人に立て、本人は渡航していません。そのためか彼が海外を舞台にした作品は、短編「イエメンにおける3日間」（“Thalātha Ayyām fī al-Yaman,” 1969）（イエメン戦争に徴兵されたエジプト兵の物語）くらいです。エジプト国内ですらカイロのほかはアレキサンドリアやカイロ近郊のファイユームへ行っただけです。彼は主としてエジプトの都会を題材にした作家であり、農村部を取り上げた作品はありません。トルコのノーベル文学賞作家であるオルハン・パムクは3年間ニューヨークに滞在したはずとトルコにいたと聞いていますが、ナギーブ・マフフーズはその点において彼よりも徹底していると言っていでしょう。

1911年 12月11日	カイロ旧市街のガマーリーヤに生まれる。父は下級官吏。
1919年	英国による愛国的指導者サアド・ザグルールの逮捕と国外追放の後、大規模な反乱が勃発。マフフーズは反英デモを日撃し、その後この事件を作品の一部に取り上げた
1924年	家族とともに、新興の住宅地アッパーシーヤに移転。その後も、マフフーズは旧市街に愛着を持つ。
1931年	英語本『古代エジプト』のアラビア語訳 <i>Miṣr al-Qadīma</i> が、進歩的知識人サラマ・ムーサーにより出版される。
1934年	大学卒業、フランス留学の選に漏れる。官吏となり、大学事務局に勤務。修士号取得のため哲学の研究を続けながら文学の研鑽をつむ。
1936年	哲学と文学のどちらかを選ぶかの苦悩に終止符を打ち、最終的に文学を選ぶ。
1938年	宗教財産省に移る。
1945年	旧市街にあるゲーリーヤ図書館に勤務、最初のリアリズム作品『ハーン・アルハリリー』（ <i>Khān al-Khalīlī</i> ）が出版される。
1952年	4月、リアリズム文学の傑作であるカイロ3部作を完成。 7月、同年自由将校団による革命で、政治社会情勢が激変すると、マフフーズは以後小説の執筆を一旦休止する。
1954年	45歳で結婚。
1956年	同年から57年にかけてカイロ3部作が出版される。
1959年	アフラム紙に『わが町内の子供たち』（ <i>Awlād Hāratinā</i> ）を連載、宗教界の反発で国内出版は不可能となる。
1967年	ベイルートで『わが町内の子供たち』出版。 第三次中東戦争でエジプトはイスラエルに大敗。 マフフーズは再び執筆を長編のみ休止。

2) 八木久美子『マフフーズ・文学・イスラム——エジプト知性の閃き——』（第三書館、2006年）を参照。

1971年	60歳で公務から定年退職する。
1981年	サダト大統領が暗殺される。後にマフフーズはこの事件を『指導者が殺された日』(Yawm Qutila al-Za'im) で取り上げる。
1988年	アラブ人作家として初めてノーベル文学賞を受ける。
1991年	心臓の手術のため短期間ロンドンに滞在。
1994年	イスラーム過激派の襲撃を受けて負傷。
2005年	『回復期の夢』(Ahlām Fatra al-Naqāha) 全204編中146編を出版。
2006年 8月30日	病院で逝去、その直後『回復期の夢』(全編)が発行される。

\* この表は Rasheed El-Enany, *Naguib Mahfouz: His Life and Times*, Cairo: The American University in Cairo Press, 2007; Jamāl al-Ghūṭānī, *Najīb Mahfūz Yatadhakkār*, al-Qāhira: Akhbār al-Yawm, 1987; Rajā' al-Naqāsh, *Najīb Mahfūz: Ṣafahāt min Mudhakkirātihī wa-Aḍwā' Jadīda 'alā Adabihi wa- Ḥayātihi*, al-Qāhirah: Markaz al-Ahrām lil-Tarjama wa-al-Nashr, 1998 などを参考に作成した。

### 3. 作風と手法の発展

マフフーズの旺盛な創作欲と精力的な文筆活動、そして長生きをしたせいで多作家であり、小説関係だけでも長編35冊、短編集17冊、その他(数行の作品を含む超短編集)2冊、計54冊が出版されています。以下はその作品群を扱います。なおナギーブ・マフフーズ作品一覧を作成いたしましたので適宜ご参照いただければと思います(この節の末尾に附してあります)。まずは長編から述べさせていただきます。

#### (1) 長編(前半期)について

最初の長編小説は『運命の悪戯』(‘*Abath al-Aqdār*, 1939)で、それに続く2冊とともに、古代エジプトを題材とする歴史的ロマンのシリーズとなり、この時期は歴史的作品の段階(1939-44)と称されています。

その後、彼の関心は現代に移り、『ハーン・アルハリリー』(*Khān al-Khalīlī*, 1945)に始まる一連のリアリスティックな作品群を発表しました。ただしオィディプス・コンプレックスを扱った『蜃気楼』(*Al-Sarāb*, 1948)を除きます。これらはカイロ旧市街を舞台として、主に中産階級に属する群像の生活を活写しています。その集大成が『バイナル・カスライン』(*Bayna al-Qaṣrayn*, 1956)、『カスル・アッシャウク』(*Qaṣr al-Shawq*, 1957)、『スッカリーヤ』(*al-Sukkarīya*, 1957)からなるカイロ3部作で、1956年から57年にかけて出版されました。これはアフマド・アブドルガワード一家3代の大河小説であり、リアリズム文学の傑作として彼の文名を高めました。この時期が社会的作品の段階(1945-57)です。

彼は三部作を1952年4月に書き上げましたが、7月にナセルの率いる自由将校団の革命が起こり、政治・社会情勢一変したため、5年間筆を置きました。休筆を終えて書き出したのが『わが町内(街区)の子供たち』で、1959年にアフラム紙で連載されました。わが町内とはアラビア語でハーラ(hāra)すなわち旧市街の地区を意味します。この作品はその地区の人々を何世代にもわたって描いており、人間と宗教、ひいては科学との関係を寓意的、象徴的筆致で描いた大作ですが、反イスラーム的であるとして宗教界から猛烈に非難されることになりました。そのため国内では出版されず、結局ベイルトで出版されることになりましたが、それも1967年になってからのことです。これ以降、『ナイル河でのお喋り』(*Tharthara fawqa al-Nīl*, 1966)までの作品は、人間の内面的諸問題や心理的葛

藤に重点が置かれていたため、この時期は哲学的作品の段階(1959-66)と見なされています。

## (2) 長編(後半期)について

次の作品『ミラマール・ペンション』(*Mirāmār*, 1967)以降は、ひとつの型にとらわれず形式も内容もテクニックも多彩になったことで時代的分類が困難となりますが、ひとつ注目すべきことはエピソード的作品が増えたことです。エピソード的作品とは、作品を一つの筋で縛るのではなくエピソードをたくさん組み合わせるもので、その最初の作品は、55人もの登場人物が出てくる長編小説『鏡』(*Marāyā*, 1972)です。その種の作品で代表的と言えるのは、78のエピソードからなる『わが町内の話』(*Hikāyat Hāratinā*, 1975)でしょう。

1977年には新たな大河小説『ハラーフィーシュの詩』(*Malḥama al-Ḥarāfīsh*)が出版されました。これは『わが町内の子供たち』の系列に属しますが、社会悪に重点が置かれています。長大な大河小説はこの作品で終わり、その後エピソード的作品の時代が本格的に幕を開けます。

その中で、1981年に出版された『シェヘラザードの憂愁』(*Layālī Alf Layla*)は、アラビアン・ナイトの後日譚と言えるものですが、時代は中世に移ります。83年刊行の『イブン・ファトゥマの旅』(*Rihla Ibn Faṭṭūma*)は理想郷を求める旅を描いており、タイトルは14世紀の旅行家イブン・バトゥータの旅行記(*Rihla Ibn Baṭṭūta*)をもじっていることが明白で、アラブ中世への回帰が志向されています。

同じく1983年に『玉座の前』(*Amāma al-'Arsh*)が出版されていますが、これは古代エジプト時代からサグト時代までのエジプトの指導者像を批判的なタッチで描いたものです。その2年後の1985年には『真実に生きる人』(*al-'Ā'ish fī al-Ḥaqīqa*)が発表されています。宗教改革を試みたアクナトンというファラオの理想と悲劇が題材とされています。両作品においては、ある意味で古代エジプトへの再訪が試みられているのが特徴です。

なお、『玉座の前』の以前に出版された『カルナック喫茶店』(*al-Karnak*, 1974)では、ナセル体制の警察国家的性格を批判しており、その後『指導者が殺された日』(*Yawm Qutila al-Za'im*, 1985)でサグトの経済開放政策を批判するなど体制の暗部にメスを入れています。このように後半期には政治がらみの作品が非常に多いのですが、ナギーブ・マフフーズは最初ナセルのエジプト革命を評価していましたし、またサグトが民主化措置を取ったことについても歓迎していました。対イスラエル和平政策にも好意的です。しかし次第にこの二人が独裁者となっていくにつれ、批判的な書き方をするようになっていったのでしょう。

## (3) 短編について

次は簡単に短編小説に触れることにいたします。短編が初めて雑誌に寄稿されたのが34年、最初の短編集『狂気の独白』が刊行されたのが48年頃と言われています。エジプトがイスラエルとの戦争で大敗すると、ナギーブ・マフフーズは二度目の休筆を行いますが、今回の休筆は長編に限られ、69年以降短編集の出版が相次ぎました。短編の主題はすこぶる多様で、実験的、前衛的な作品や回想的、夢物的断想なども含んでいます。分量も中編クラスがあるかと思えば、数頁から数行の超短編もあります。

若干例を挙げますと、『狂気の独白』は物静かな男が突然狂気の発作に襲われ、数々の奇行を演じながら、常識的な生活の営みと制約に対し無意識の反逆を試みる有様を切り口の鋭い筆致で描いています。

次に、「ザアバラーウィー」(“Za‘balāwī”)は1963年出版の『アッラーの世界』(*Dunyā Allāh*)の一編で、難病にかかった男が巷間で聖者視されていたザアバラーウィーの奇跡による治癒を願いますが、神出鬼没のザアバラーウィーに会うことができないという筋立てで、これを一種の神探しと解釈する見方もあります。

「バス停のひさしの下で」(“Taḥta al-Mazalla”)は1969年に出版された同名の短編集の取められた作品です。バス停留所の前の広場で一群の人々が繰り広げる荒唐無稽で不条理な世界を描いています。

また最後の短編小説である『回復期の夢』(*Ahlām Fatra al-Naqāha*, 2006)もユニークです。これは内容的には、夢想集とでも言いましょうか、量的には数行のものを含む非常に短い206編からなるもので、作者は最後の3編を死の48時間前に編集者に送ったと言われています。ただエナーニーはこの『回復期の夢』を「短編」ではなく「その他」に分類しています。

### 【ナギーブ・マフフーズ作品一覧】

長編 35冊

(アラビア語名)	(英訳名)	(邦訳名)	(発行年)
<i>'Abath al-Aqdār</i>	Khufu's Wisdom	運命の悪戯	1939
<i>Rādūbis</i>	Rhadopis of Nubia	ラドビス	1943
<i>Kifāh Tiba</i>	Thebes at War	テーベの闘い	1944
<i>Khān al-Khalīlī</i>	Khan al-Khalili	ハーン・アルハリリー	1945
<i>Al-Qāhira al-Jadīda</i>	Cairo Modern	新しいカイロ	1946
<i>Zuqāq al-Midaqq</i>	Midaq Alley	ミダック横町	1947
<i>Al-Sarāb</i>	The Mirage	蜃気楼	1948
<i>Bidāya wa-Nihāya</i>	The Beginning and the End	始めと終わり	1949
<i>Al-Thulāthīya:</i>	The Cairo Trilogy	カイロ三部作	
1 <i>Bayna al-Qaṣrayn</i>	Palace Walk	バイナル・カスライン	1956
2 <i>Qaṣr a-Shawq</i>	Palace of Desire	カスル・アッシャウク	1957
3 <i>Al-Sukkarīya</i>	Sugar Street	スッカリーヤ	1957
<i>Awlād Hāratinā</i>	Children of the Alley	わが町内の子供たち	(新聞連載) 1959, (ペイルートで出版) 1967
<i>Al-Liṣṣ wa-al-Kilāb</i>	The Thief and the Dogs	泥棒と犬	1961
<i>Al-Summān wa-al-Kharīf</i>	Autum Quail	渡り鳥と秋	1962
<i>Al-Ṭarīq</i>	The Search	道	1964
<i>Al-Shahhādah</i>	The Beggar	乞食	1965
<i>Tharthara fawqa al-Nīl</i>	Adrift on the Nile	ナイル河でのお喋り	1966
<i>Mīrāmār</i>	Miramar	ミラマール・ペンション	1967
<i>Al-Marāyā</i>	Mirrors	鏡	1972
<i>Ḥubb taḥta al-Maṭar</i>	Love in the Rain	雨の中の愛	1973
<i>Al-Karnaq</i>	Karnak Cafe	カルナック喫茶店	1974
<i>Ḥadra al-Muḥtaram</i>	Respected Sir	局長殿	1975
<i>Hikāyāt Hāratinā</i>	Fountain and Tomb	わが町内の話	1975



<i>Qalb al-Layl</i>	Heart of the Night	夜の心	1975
<i>Malhama al-Harāfish</i>	The Harafish	ハラーフイーシュの詩	1977
<i>'Aṣr al-Ḥubb</i>	The Age of love	愛の時代	1980
<i>Afrāḥ al-Qubba</i>	Wedding Song	結婚式の歌	1981
<i>Layālī Alf Layla</i>	Arabian Nights and Days	シェヘラザードの憂愁	1982
<i>Al-Bāqī min al-Zaman Sā'a</i>	There Only Remains an Hour	残された時は一時間	1982
<i>Rihla Ibn Faṭṭūma</i>	The Journey of Ibn Fattouma	イブン・ファットーマの旅	1983
<i>Amāma al-'Arsh</i>	Before the Throne	玉座の前	1983
<i>Yawm Qutila al-Za'im</i>	The Day the Leader Was Killed	指導者が殺された日	1985
<i>al-'Ā'ish fi al-Haqīqa</i>	Akhenaton: Dweller in Truth	真実に生きる人	1985
<i>Ḥadīth al-Ṣabāḥ wa-al-Masā'</i>	Morning and Evening Talk	朝と晩の物語	1987
<i>Qushtumur</i>	Qushtumur Café	クシュトムル喫茶店	1988

短編集 17 冊

<i>Hams al-Junūn</i>	Whispers of Madness	狂気の独白	1948?
<i>Dunyā Allāh</i>	God's World	アッラーの世界	1963
<i>Bayt Sayyi' al-Sum'a</i>	A House of Ill Repute	悪評の家	1965
<i>Khammāra al-Qiṭṭ al-Aswad</i>	The Black Cat Tavern	黒猫酒場	1969
<i>Tahta al-Mazalla</i>	Under the Bus Shelter	バス停のひさしの下で	1969
<i>Ḥikāya bi-lā Bidāya wa-lā Nihāya</i>	A Tale without Beginning or End	始めも終わりもない話	1971
<i>Shahr al-'Asal</i>	The Honeymoon	蜜月	1971
<i>Al-Jarīma</i>	The Crime	犯罪	1973
<i>Al-Ḥubb fawqa Ḥaḍaba al-Haram</i>	Love under the Pyramids	ピラミッドの下の愛	1979
<i>Al-Shayṭān ya 'izu</i>	The Devil Preaches	悪魔の説教	1979
<i>Ra'aytu fi-mā yarā al-Nā'im</i>	I Saw in a Dream	夢の中で見た	1982
<i>Al-Tanzīm al-Sirrī</i>	The Secret Organization	秘密機関	1984
<i>Ṣabāḥ al-Ward</i>	Good Morning to You	おはよう	1987
<i>Al-Fajr al-Khādhīb</i>	The False Dawn	偽りの暁	1989
<i>Al-Qarār al-Akhīr</i>	The Fainal Decision	最後の決定	1996
<i>Ṣadā al-Nisyān</i>	Echo of Oblivion	忘却のこだま	1999
<i>Futūwa al-'Uṭūf</i>	Utuf Thug	ウトーフ地区の暴れん坊	2001

その他の作品 2 冊

<i>Aṣḍa' al-Sira al-Dhātīya</i>	Echoes of an Autobiography	自伝のこだま	1994
<i>Ahlām Fatra al-Naqāha</i>	The Dreams and Dreams of Departure	回復期の夢	2006

\* 上記以外に、*Miṣr al-Qadīma* (古代エジプト), 1931 (James Baikie, *Ancient Egypt*, London: A & C. Black, 1912 のアラビア語訳) があり、その他、映画脚本 (62 本)、戯曲、随筆などを書き、学生時代より短編の習作や、論文 (うち 1930 年から 45 年までに 47 編) を雑誌に発表している。

\*\* この表は Rasheed El-Enany, *Naguib Mahfouz: The Pursuit of Meaning (Arabic Thought and Culture)*, London: Routledge, 1993; id., *Naguib Mahfouz: His Life and Times*, Cairo: The American University in Cairo Press, 2007 をもとに作成したが、Muḥammad Jibllī が未刊行の作品から選んだ短編集 *Futūwa al-'Uṭūf* を新たに追加した。邦訳作品については、は八木久美子『マフフーズ・文学・イスラム』を参照し

つつ、それらの題名を採用したが、それ以外は塙が仮訳した。同書には、邦訳作品として塙治夫『狂気の独白』（現代アラブ文学選、創樹社 1974）、塙治夫『渡り鳥と秋』（アジア経済研究所 1976）、池田修『アルカルナック』（アジア経済研究所 1978）、塙治夫『バイナル・カスライン』（河出書房新社 上巻 1978 下巻 1979）、高野晃弘『蟹気楼』（第三書館 1990）、塙治夫『ナギーブ・マフフーズ短編集』（近代文芸社 2004）、青柳伸子『渡り鳥と秋』（文芸社 2002、英語からの重訳）が挙げられているが、それ以外にも塙治夫『シェヘラザードの憂愁』（河出書房新社 2009年）がある。

#### 4. 『シェヘラザードの憂愁』（河出書房新社より 2009 年出版）を翻訳して

ここからは最近翻訳いたしました『シェヘラザードの憂愁』についてお話しさせていただきます。原作は 293 ページですが、訳してみると 353 ページと分厚いものになってしまいました。アラビア語を訳すと長くなるということもありますが、編集者からの提案もあって難解なところを意識したためでもあります。原語で *Laylī Alf Layla*（千夜の夜々）というタイトルを『シェヘラザードの憂愁』と訳すことに決めたのも、わかりやすく魅力的なタイトルにしようとする編集者からの提案をうけてのことです。

『シェヘラザードの憂愁』は内容的にはエピソード的作品に分類できます。と言いましても単にエピソードを集めたものではなく、スルタンを全体の軸とする大枠があります。前に申し上げましたように、いわばアラビアン・ナイトの続編でありまして、ジンや天使も出てくるファンタスティックかつ奇想天外な面白味があるのですが、同時にまたそのことが訳しにくくもしています。

この作品はアラビアン・ナイトから素材を得ながら、ナギーブ・マフフーズらしい宗教的かつ哲学的味付けが施されている点に特徴があります。宗教的にはシェイフ・アルバルヒーの存在が重要です。スーフィーとして現世を超越しており、日常的な出来事には煩わされません。その典型的なエピソードとして、娘婿のアラディンが処刑されてしまうことになり、彼の父親がバルヒーに助けを求めに来たときに、彼は「天命である」と言い、自分の娘婿の死に際しても冷静であったことが挙げられるでしょう。

一方哲学的味付けとしては、大枠の冒頭に「存在するあらゆるものの中で人間という存在が最も不可解なものじゃな」とスルタンに言わせている点にまず注目したいと思います。ただし、ここで「人間」と訳したのは私の失敗で、実はこれに当たる語はアラビア語の *wujūd*（存在）です。しかし、「存在の中の存在」と訳すと意味が分からなくなるので、編集者の提案もあって「人間」といたしました。さらに最終章で、シャハリヤールがさまよって天国にもぐりこみ、禁じられた門を開けてしまい、よぼよぼの老人となって地上に追い返されます。そこでアブドゥッラー・アルアーキルという警察長官に「お前さんに、経験を積んだ男の言葉を教えよう。≪真理が誰にもそれに至る道を作らず、誰からもそれへ到達する望みを奪わず、人間たちが当惑の砂漠を駆け回り、疑惑の海に溺れるに任せるのは、真理の嫉妬の一つである。真理に到達したと考える者は、そこから引き離され、引き離されたと考える者は、道に迷っている。真理への到達もなく、真理からの逃亡もない。それは絶対に避けられないものである≫」と言わせています。これはイスラームの教えというよりは、やはり哲学を学んだナギーブ・マフフーズならではのものでありましょう。

最後に補足としてもう一点触れておきたいことがあります。中世を扱った単なる娯楽小説として彼がこの作品を書いたのではなく、現代へつなげているということです。すなわち現実の政治社会

の動きと関連させなければならないとの考えから、社会の体制・制度の変化や改革の必要性に触れているのです。そのような例として次のエピソードを紹介したいと思います。サナーン・アルジャマーリーという若い人物が登場しますが、彼の父親がジンに騙された形で悪事を働き処刑されてしまいます。父親がそのような目に遭ったこともあり、サナーンは社会変革を目指す青年に育っていききました。かつてバルヒーの教えを受けながらも秘密の政治結社に入って、一種の革命青年に成長していくわけですが、彼もまたジンに騙され悪事を犯して処刑されてしまいます。こういう状況下、スルタンは多くの人を殺し、権力者として大変な前科者である己の行いを悔いて、王位を退くことになります。作品には、ほかにも統治者の独善や社会の正義、高官が賄賂をもらうなどの不正を糾弾している場面があります。

この訳書について日本経済新聞で岡真理先生に結構な書評を書いていただいたことに大変感謝しております。

## インタビュー（岡真理、福田義昭、勝田茂、藤元優子）

### Q. 岡真理

Q. ご講演の冒頭で外務省に入省されてカイロへ行かれ、戦後初のアラビア語研修生となられたとうかがいましたが、アラビア語はご自身でご希望なさったのですか？

A. いいえ、英語で試験を受けて入省したものの、当初は赴任地がわかりませんでした。人事課に呼び出されて、「ポルトガル語をやれ」と言われたのですが、ポルトガルとブラジルだけでしか話されていない言語なので気がすすまず、「考えさせてください」と返事いたしました。するとしばらくしてまた呼び出されて、「アラビア語を」ということになったというわけです。アラビア語は地図で見ると広い地域で話されているからこれはいいと思い引き受けました。アラビア語を勉強したのも偶然であれば、ナギーブ・マフフーズに出会ったのも偶然です。したがってナギーブ・マフフーズの翻訳ができたのもかなり偶然に左右されているように思えます。

Q. エジプト以外でアラブ圏ではどの国に赴任なされたのでしょうか？

A. エジプトに2回赴任したことはすでにお話ししたとおりです。58年1回目のエジプト勤務から帰国してしばらくして、まもなくバイルートに出されるらしいと聞き、最初の赴任期間が5年近かったため、次の赴任も5年になると結婚できなくなると思い、あわてて嫁さん探しをし、結婚して数ヶ月後に妻と一緒にレバノンに赴任し、そこからシリアに転勤しました。次にまたエジプト、その後サウジアラビア、オーストラリア、イラク、カタール、オマーンに歴任しました。アラブ世界では7カ国のどさ回りをしたことになります。マグリブへは全然行っておりません。

Q. エジプトへ初めて赴任された1953年というのは革命の直後ですね。

A. 1952年エジプト革命の年に外務省に入り、その翌年から同国に勤務しました。まさにナセルが英雄だった時代です。

Q. 現地の小学校でアラビア語を勉強されたとうかがいました。

A. 外務省には戦前からそういう伝統があります。カイロ郊外のスクラーシー小学校に入りました。満員のバスに揺られて小学校へ行き、午前中いっぱい勉強しました。幼い子どもたちとともに勉強するわけですから、子供たちが私のまわりに寄ってきては、服を引っ張ったり、からかったり、また教室で私が何かへまをすると笑ったりするのでこずりました。その学校にいた親切な先生が非常に私のことを気にかけてくれまして、家庭教師になってもらいました。それで午後はその先生のお宅にうかがい、アラビア語を教えてもらいました。その後、一年半の研修を終えてから大使館での実務が始まりましたが、勤務は朝8時から午後3時ころまでだったため、勤め出してから勉強を続けていました。そしていろいろな文学作品を読み始めたという経緯になります。

Q. 多くの作品を読んだ中で、なぜマフフーズに惹かれたのでしょうか。私自身は、マフフーズとそりが合わないでお聞きしたいと思います。

A. 初めはターハー・フセイン (Tāhā Ḥusayn, d.1973) とかタウフィーク・ハキーム (Tawfīq al-Hakīm, d.1987) とか有名なエジプト人作家の作品を一通り読みました。ほかにもユースフ・イドリース (Yūsuf Idrīs, d.1991) やユースフ・スィバーイー (Yūsuf al-Sibā'ī, d.1978) も読みましたが、マフフーズがいいなと思ったのは、最初に読んだ短編小説「狂気の独白」が気に入ったからです。平凡な人間が狂気の発作を起こすというストーリーで、不意に人を殴ったり、女の人のおっぱいに触ったりと狂人でなければできないようなことが描かれていて、普通ではないその着眼点に惹かれた訳です。

Q. 「狂気の独白」は『現代アラブ文学選』に収録されていますね。私が初めて読んだアラブ小説がまさにそれでした。私の母校東京外国語大学では学園祭で語劇というものを演じます。当時、語劇のシナリオにする作品を探しており、この作品を目にしたのですが、「狂気の独白」は舞台上で演じられないなと思いました。

A. 確かに先生が関心を寄せていらっしゃる性的描写がそれほど露骨に表現されていませんね。『シェヘラザードの憂愁』でも人間の男性を誘惑する女のジンが登場しますが、それほど具体的ではありません。ナギーブ・マフフーズの全作品を見まわしても、濃密な描写はほとんどありません。

Q. ユースフ・イドリースの作品では、批評家からもう少し控えられないのかと苦言を呈されるくらい性的モチーフが繰り返され、また地の文にまでアーンミーヤ (アラビア語方言) を使います。この2点においてマフフーズとは対極的であるように思えます。

A. それらに加え、作品の種類も豊富なこともナギーブ・マフフーズの特徴と言えるのではないのでしょうか。

Q. 『バイナル・カスライン』を翻訳されたときのご苦労についてお聞かせください。

A. カイロ駐在中に翻訳作業に取りかかりましたが、大部分は日本へ帰ってから本格的に行いました。英訳もまだ出ていないところで本当に苦勞し、正確でない訳出もあり、またかなり意識もしていました。

Q. 外務省でお仕事をされながら、どうやって、このような大部な作品の翻訳ができたのでしょうか。

A. 日本人として初めてマフフーズの作品、しかも彼の代表作の翻訳に当たったことは光栄でしたが、実際の作業となると本当に大変でした。しかし発行元が編集委員会を立ち上げ、翻訳候補の作品リストを作り、『バイナル・カスライン』の翻訳に私を指名してきた以上、逃げるわけにはいきません。しかも締め切りがあるので、否応なく任務の遂行に励み、帰宅後机に向かい、深夜に及ぶこともしばしばでした。

Q. これから訳してみたいと思われる作品は？

A. 1988年に出版された最後の長編作品『クシュトムル喫茶店』(Qushtumur)ですかね。淡々とした物語ですが、アッパーシーヤの友達との年を取ってからの落ち着いた、静かな会話を楽しむ作品です。最後の作品であるために、刺激的ではないものの、滋味あふれる小説です。

Q. ご講演中で言及なされていた『ハラーフィーシュの詩』はいかがでしょう。お話をうかがって私は大変興味をもったのですが、翻訳のご予定はありますか？

A. この作品と、それに先立つ『わが町内の子供たち』は大作で、高齢の私には無理です。若いこれからの方たちに期待したいと思います。

Q. エジプトだけでなく、イラク、シリアなどでも素晴らしい作家はいると思いますが、塙先生はなぜ一貫してマフフーズに関わっていらっしゃるのですか。

A. 全く興味がないわけではありません。エジプトだけでも、最近読んだもので、非常に刺激的な長編『ヤアコービアン・ビルディング』(‘Alā’ al-Aswānī, ‘Imāra Ya ‘qūbīyān, 2002)には、ナギーブ・マフフーズにない迫力があり、エロティックな場面もあります。余力があれば、訳してみたいところですよ。

## Q. 福田義昭

Q. 私は去年エジプトで行われた小説フォーラムに参加いたしました。多くの研究者や作家が集っており、気づけばホテルの自室のドアの前に多くの著書が積まれていました。訳したいとは思いつつもなかなか叶いませんが、塙先生の翻訳に対する情熱には敬服し、また刺激を受けています。マフフーズはアラブ世界の中心的な作家ですが、男性であり、アラブの文化的中心であるエジプト出身で、フスハーで執筆するなど、何を取っても中心的な存在です。これはマイノリティー文学や女性文学が目される最近の一般的な文学研究の関心からは外れるもので、ある意味で刺激がないとも感じられます。塙先生はナギーブ・マフフーズの作品を訳してきて日本人読者の反応に関してどのように感じておられますか。

A. 一言でいえば「失望」です。私がナギーブ・マフフーズを買いかぶりすぎているのかもしれませんが、とにかく日本人読者は西洋の作品を好んで読みますが、日本になじみの薄い地域や後進国の作家については熱心ではありません。ナギーブ・マフフーズがノーベル文学賞を取った直後には、一部の人々の間で関心が高まりましたが、それもすぐに冷え込んでしまいました。日本で紹介して売

れるかどうか出版の可能性につながってきます。したがってナギーブ・マフフーズの作品を翻訳して出版することは、かなり難しい状態であると言えます。

**Q.** 『シェヘラザードの憂愁』を翻訳なさるきっかけはどのようなものでしたか？

**A.** 大変おもしろく、また私を刺激する材料がありました。これなら出版社を見つけることができそうだと感じたのも、大きな理由です。実際に、河出書房新社が出版を引き受けてくれました。他方、福田先生のおっしゃったことに関してですが、確かにナギーブ・マフフーズはもはや過去の作家になってしまったかもしれません。リアリズムについても、ヨーロッパでは使い古された手法となりました。最近トルコのオルハン・パムクがノーベル文学賞を取りましたが、彼の作品などは日本で受けています。それに対しナギーブ・マフフーズはまじめで几帳面で羽目を外しません。またファンタスティックであってもどこか哲学的で理屈っぽく、一般読者には難しいと言わざるをえません。

**Q.** アラビアン・ナイトはアラブ世界では到底文学ともみなされていませんでしたが、ヨーロッパでは評価されてきました。アラブ世界では、ターハー・フセイン作『シェヘラザードの夢』(Tāhā Husayn, *Ahlām Shahrazād*, 1943) や、戯曲ですがタウフィーク・ハキーム作『シェヘラザード』(Tawfiq al-Hakīm, *Shahrazād*, 1934) などがあります。シャハリヤールの哲学者的性格などを考えても、これら二つの作品の主人公はどちらかと言うとシェヘラザードの語り相手であるシャハリヤールで、アラビアン・ナイト(千夜一夜)が終わったところから物語が始まるという構図まで(これは西洋の作品などにもよくありますが)同じです。ナギーブ・マフフーズの『シェヘラザードの憂愁』はまさにタウフィーク・ハキームの『シェヘラザード』の影響を受けているのではないのでしょうか。

**A.** 詳しいことはわかりません。もしかしたら影響を受けているのかもしれませんが。あとがきに書いたことですが、日本のアラビアン・ナイト研究者である西尾哲夫先生は『アラビアンナイト——文明のはざまに生まれた物語』のなかで、「文明の狭間を往還してきたアラビアン・ナイトの千二夜目の物語を紡ぎだしていくことこそが、世界文学としてのアラビアン・ナイトを受け継ぐことになった現代人に課せられた役割ではなからうか」と書かれています。大きな枠組みのなかで考えると、ナギーブ・マフフーズの『シェヘラザードの憂愁』はまさにこういった期待に応えるものと言えるでしょう。私はそこに大きな意味があるのではないかと考えています。

## **Q. 勝田茂**

**Q.** トルコの現代作家の多くはまず詩を書き発表し、そして短編小説に入ります。というのも、トルコでは最初から長編を発表できる機会がきわめて少ないからですが、ナギーブ・マフフーズは最初の著作で長編を書いています。これはアラブの作家として一般的なのでしょうか、それともナギーブ・マフフーズに特有のことなのでしょうか。

**A.** ナギーブ・マフフーズは1930年代代ごろから短編小説の習作を始めましたが、それらが雑誌に載るようになって、短編小説集となったのがようやく1948年ごろのことです。長編はそれ以前の1939年に出版されています。基本的には作家の資質が大事ですが、短編であろうが、長編であろうが、とにかく人目に留まって、出版が拡大したのでしょう。他のアラブ小説の作家がどうであ

るかは詳しく存じませんが、詩から入るという例はあまり見ないような気がいたします。

Q. ナギーブ・マフフーズ自身は詩を書いたのでしょうか。

A. 詩集は出しておりません。しかし作品中にしばしば神秘詩が出てきます。

Q. この作家はカイロの旧市街にこだわっていますが、アラブの中世にさかのぼり、回顧するという意図でそうしているのでしょうか。

A. 彼は初期の作品で自分の生まれたカイロ旧市街を舞台に使い、生活感のにじみ出たりアリストテリックな描写をしましたが、その時点でアラブ中世にさかのぼる意図はなかったと思います。その後これにはあきたらず、寓意的かつ象徴的な作品を書きだしました。それと同時に、『シェヘラザードの憂愁』や『イブン・ファットーマの旅』によってさらに作品の幅が広がったと言えます。アラブ中世への回帰はそうした作風の広がりの中の一部をなしているのではないのでしょうか。

Q. 『シェヘラザードの憂愁』は哲学的かつファンタスティックであり、アラビアン・ナイトと同じようなスタイルで展開しているようですが、今の日本の読者にどのような点がアピールすると思われませんか。また実際にどのように受け止められているのでしょうか。

A. 彼が書くからには単なる後日譚ではなく、新しい味付けがなされたことです。その点で、私が強調したいのは、スーフィーの登場とか哲学的な要素で、人生の意味を問うということにつながっていると思います。それはいかにもマフフーズらしい特徴ですが、一般の読者には理屈っぽく、むしろ読書欲を妨げたかも知れません。確かに読みにくさがある上、私の翻訳技術のつたなさについても反省しています。たとえば、この作品には多数の人物が登場しますが、登場人物の名前は、読者にはなじみのないものであり、わかりにくかったのではないのでしょうか。今から思うと登場人物を紹介した一覧表を作るべきだったと反省しています。

#### Q. 藤元優子

Q. アラビアン・ナイトはそのタイトルとは裏腹に、もともとはイラン発祥の文学であり、シャハリヤールにせよシェヘラザードにせよ登場人物の名前はイラン人の名前です。そういうわけでイランの人々は自分たちの文学だと思っています。エジプトではアラビアン・ナイトがヨーロッパで評価されたのち再輸入されたという経緯がありますが、イランでは19世紀中頃に当時の皇太子の命令で翻訳がなされたのが始まりです。それまではアラビア語からペルシア語に翻訳されていませんでした。皇太子には、シェヘラザードではありませんが、夜寝るとき専用の語り部がついていて、そのことが翻訳を指示するきっかけになったようです。つまりイラン起源の作品でありながら、イランでも19世紀中頃に再輸入されたというわけです。折しもその時代は近現代文学が盛んになってきたところで、その翻訳作品は新しい文体の形成に寄与したと言われています。私が興味を持っているものに『三十一夜』(Forugh Shahab, *She Hezar-o-Yek Shab*, Tehran, 1989/90) という19世紀後半の王宮に入った女性が主人公の物語があります。作者が主人公の女性というマジックリアリズム的なものなのです。もっとマジックリアリズム的な作品に『何千夜一夜』(Moniru Ravanipur, “Chandin Hezar-o-Yek Shab,” *Sirya, Sirya*, Tehran, 1993/4; モニールー・ラヴァーニープール(藤元優子訳)「何

千夜一夜』『中東イスラム文化の諸相と言語研究』（大阪外国語大学、1999年）207-218頁）という物語があります。テヘランの街をさまよう主人公の女性が物語を作り上げて嘘八百を並べて、美容院での代金を無料にしてもらったり、車で送ってもらったりします。彼女は千夜一夜物語の語り手であるシェヘラザード（私の訳ではシャハルザードとしています）と同居しているのですが、彼女は話の種が尽きてしまって翌朝にも殺されそうなので、それを阻止するために同居人の女が夜な夜な町に出て話を集めている、というのです。最終的に女が自分のアパートへ帰ってきて玄関でシェヘラザードに出迎えられますが、その玄関の正面には大きな鏡が置かれています。そして、「早く話を聞かせて」と急かせるシェヘラザードに対して、女は鏡を見つめ、「おお、幸多き王様」と語りかける、というところで物語は終わっています。つまり、語り手である女は、実は王その人でもある、ということになります。これらは語り部としての女性たち、口承でしか伝えて来られなかった女性たちが小説家であったことを証明する作品群とも考えられます。

さて文体についてお伺いしたいのですが、『シェヘラザードの憂愁』の中で使われている文体はアラビアン・ナイトの文体とは違っているのでしょうか。違っている場合、どのように違うのでしょうか。

A. おっしゃるとおりアラビアン・ナイトはイランから入ってきてバグダードで集大成され、エジプトで手が加えられたものですが、題名が千一夜、つまり *Alf Layla wa-Layla* というアラビア語であることなどからアラブの人々はアラブ文学だと思っており、そのような経緯を知らない人が多いように思います。文体については、私は専門家でないので、確かなことは言えません。特に、アラビアン・ナイトは時代的変遷を経て完成したものであり、また種々の版があります。ただ手元にあるものを見ますと、基本的に文語体で、現在でも通用するものです。

Q. 見せていただいた原作の表紙に興味を惹かれました。ある意味、稚拙というか、内容もあっていないような気がします。一方英訳本の表紙は、天使が飛んでいて、苦しめられている人間がいて、いかにもアラビアン・ナイトという感じです。

A. これはエジプト人の挿絵画家ガマル・クトゥブ (*Jamāl Quṭb*) が描いた絵です。彼の絵にはヨーロッパ的な側面があります。ちなみに邦訳の表紙の参考にと原作のこの表紙を出版社に見せましたが、一目見て「こんなヨーロッパ的な表紙絵はアラビアン・ナイトに似つかわしくないからだめだ」と言われてしまいました。

Q. わたしもさまざまところで妥協せざるを得ないことがありますので、よくわかります。専門家としては書いてあるとおりに訳したいところも受け入れられなかったり、また注が多すぎてもいけなかったりしますね。今日は貴重なお話を聞かせていただきありがとうございました。

A. わたしは研究者ではなく、一介のアラビア語屋ですが、今回は現代中東文学研究会に参加する機会を与えていただき、身に余る厚遇を受けましたことに深く感謝いたしております。ありがとうございました。